



Title	科学的論証と文学解釈の教育上の関係についての試論：デカルト精神のアンカルナション教材としての短詩解釈(大岡信『折々のうた』を例として)
Author(s)	和彗, 則明
Citation	études françaises. 2006, 38, p. 89-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

科学的論証と文学解釈の 教育上の関係についての試論

—デカルト精神のアンカルナシオン教材としての短詩解釈
(大岡信『折々のうた』を例として)—

和 夢 則 明

— 目次 —

序論

1. 学生たちに実施したアンケート調査の内容
2. アンケート①の回答の全体的分析
3. アンケート①の回答の具体例とその分析
4. より長文への一般的モデル化の試み
5. アンケート②の回答の全体的分析と具体例の紹介

結論

序論

本論文の目的は、日本の国語教育、とりわけその中における文学解釈が、科学的論証力や、さらには科学的思考力の育成にとって重大な障害となっている可能性についての仮説とその根拠を提示することにある。

筆者が30年以上にわたって、400本近くの社会科学系卒業論文を指導・審査するなかで気がついたことがいくつかある。

その一つは、学生たちが、科学的な文章を書けないことである。科学的論証のためには、数学が典型であるように、ひとつひとつの言葉や用語が厳密に定義され、誰が読んでも別の解釈、たとえば誤解釈が生じないような、可能な限り一義的な文章を書く力が必要であるにもかかわらず、そのような文章を書く力が日本の学生たちには、ときには全く欠如しているか、ほとんど

の場合、不十分である。

もうひとつは、学生たちが十分な推論力を持っていないことである。さまざまな科学において、感覚ではとらえられないことについて、感覚的根拠に基づき、論理の連鎖において認識する推論が不可欠のものとしてある。そのためには、感覚でとらえられる文章や、資料（史料）や、統計データが、どのようなことを意味する可能性があるか、ということについて、一つのケースだけについて主観的に思い込むのではなく、考える限りのケースを客観的に考えることができる思考力が必要であると思われる。しかし、これまでの卒論指導と審査からの統計的結果としていえば、日本人学生にはそのような力は不十分であるといっていよい。

最後のひとつは、そのような推論力の問題と重なるかたちで存在している、独創性の欠如である。独創性という能力は、さまざまな要素から構成されると思われるが、その一つは、他の人たちが考えることができないようなケースについて考えることができる、たとえば、他の人たちが考えることができない別の解釈を考えることができる、ということであろう。そのような意味での独創性も学生たちには不足している。

それら三つのことの重要な原因の一つが、国語教育における文学解釈にあるのではないか、という仮説も、気がついたことの一つである。あくまでも重要な原因の一つであって、国語教育だけが原因ではなく、他の科目の教育にも原因があると思われるが、科学的思考や科学的論証が、基本的には母語によってなされることを考えると、国語教育の影響の大きさは否定できないと思われる。

その問題をより明確にするために、2004年度の授業で、朝日新聞に掲載された、大岡信『折々のうた』の二つを用いて、学生たちに小テストを兼ねた二つのアンケート調査を行った。それらのアンケート調査に基づいて、本論文の目的を達成する。

1. 学生たちに実施したアンケート調査の内容

アンケートを実施した時期は、2004年の6月であり、実施した授業は、

3・4年生向けの社会科学系授業である。その授業の2004年度の受講登録者数は54人であり、そのうちアンケートに答えた学生数は40人である。学生の専攻でみると、1人が英語専攻であるが、残りのすべてはフランス語専攻である。この構成は、アンケート結果にはほとんど影響がないと考えられる。男女別でみると、40人のうち25人（62.5%）が女性であり、15人（37.5%）が男性であり、女性への偏りが特徴の一つとなる。学年別でみると、3年生と4年生がそれぞれ50%を占めている。学年が1年違うことも、回答結果を見る限りは、重要な意味を持っているとは思えない。なお、アンケートの回答時間として、質問それぞれに40分間あてている。

実施したアンケートは二つある。そのうちの一つは、2004年5月13日と同5月25日の朝日新聞朝刊に掲載された、大岡信『折々の歌』を用いたものである。具体的には次のようになる。

アンケート①

次の二つの和歌解釈を読んで、可能であれば、大岡信の解釈を批判的に検討するか、自分なりの新しい解釈を書いて下さい。

－和歌 a－

子の道を変えたる痛みこっそりと積木置くように並べかへたき（前田弥生）

『日輪蒼く』（平15）所収。歌集でこの歌と並ぶ歌は「指揮者になる夢持ちし長の子が研究室にマウス操る」。若き日には音楽の指揮者になるのが夢だった長男が、今は研究室でコンピューターのマウスを操っている。芸術家から科学者へ。息子の進路の転換には、どうやら母親なる作者が大きく関与したらしい。そのことへのひそかな悔いを洩らした歌だが、これを読んで別の感慨もある。母親の感化力は大いなるかな。

（原文ルビは省略）

－和歌 b－

手に入れるまでの苦心を聞くわれもその新しきシャツかも知れず（松本典子）

『いびつな果実』（平15）所収。気に入ったシャツを苦心のあげくに手に入れた男性の、たぶん自慢しながらの成功談を黙って聞いている女性。この私もそのシャツかもしれないと思いながら。こういう時の男性というのは、冷笑的に言えば鼻持ちならない色男だが、女性の方は醒めた目の皮肉屋さん。でも相手を優しい気持で思っている。「つねに紛れもなく私自身で」あろうとする（あとがき）誠実さを誇りに。

（原文ルビは省略）

上記アンケート実施にあたっては、朝日新聞の当該欄をそのままコピーして学生たちに渡してあり、それが朝日新聞の朝刊第一面であることや、大岡信という筆者の経歴や社会的評価や、『折々のうた』がフランス語に訳されフランスで出版されていることなども、学生たちには伝えている。

二つめのアンケートは、次の回の授業で、アンケート①に対して学生たちが書いていることの集計・分析結果と、成り立ちうるさまざまな解釈を、詳しく紹介した後に実施したものである。

アンケート②

「この授業で行ったことと高校までの授業とを比較して、感じたことや考えたことを自由に書いて下さい。」

和歌の解釈に限定してアンケート調査を行なうのではなく、大岡信の解釈を含めてアンケート調査を行なっているのは、学生たちの独創性の基礎となる批判力の育成を一つの教育目的としているからである。というのは、独創性というのは、それまでになかった新しいものに関係する能力である以上、過去のすべてのもの、とりわけこれまで権威とみなされてきたものへの批判力が不可欠の前提条件だからである。すなわち、学生たちが、朝日新聞という権威や、大岡信の名声や評価に左右されずに、どれだけ批判的な解釈ができるかということも、小テストを兼ねたアンケート調査の目的として含まれていることになる。その目的はまさしく、どのような学問的権威であれ徹底して疑い尽くすと共に、庶民の命をかけた思考の中に真理を見出したデカル

トの求めた精神そのものの形成という目的に他ならないであろう。

それらのアンケートに対する学生たちの回答結果を次にみてみよう。

2. アンケート①の回答の全体的分析

まず、アンケート①について学生たちがどのような回答を行っているか分析してみよう。

原則的にいえば、他の研究者が、アンケート回答原表を自分で直接確認できないような場合、科学的論証のためには、アンケート回答原表のコピーを含めてすべてを論文の不可欠の一部として提示すべきであると考えられる。なぜなら、それらは論証のための基礎的な証拠であるから、提示がなければ、他の研究者は、アンケートの分析にミスや人為的な修正が無いかどうか確認できない。その結果、論証そのものへの同意や反論自体が不可能となるからである。今回の場合もそのケースにあたるが、紙幅の都合からやむをえず省略する。ただし、コンピューター用の画像データとして処理してあるので、必要なときには簡単に提示できるかたちになっている。

最初の和歌 a について学生たちの回答をまとめると、ほぼ大岡信と同じ解釈を行っているグループと、なんらかのかたちで大岡信の解釈に反論を加えているグループと、和歌そのものを誤解しているか、または回答を書いていないグループに分けることができる。それらのグループの集計結果と、全体における％は次のとおりである。

大岡信と同一の解釈	9人	22.5%
大岡信の解釈への反論	28人	70.0%
無回答・その他	3人	7.5%

標本数が40人であることから統計的信頼度が低いため、それぞれの95%信頼区間を計算すると次のような結果となる。

大岡信と同一の解釈	9.6%～35.4%
大岡信の解釈への反論	55.8%～84.2%
無回答・その他	0%～15.7%

信頼区間からみると、無回答グループと同一の解釈のグループには、重なりがあるが、重なりの部分の全区間に占める割合は17.2%であるため、関係が逆転する可能性は、多いとはいえないと考えられる。他方、同一の解釈グループと、反論のグループには重なりがまったくないため、全国の大学で同じようなアンケートをとったとしても、男女比に関する修正を除くならば、これら三つのグループの相対的關係に変動は生じない可能性が強いといえる。すなわち少ないときでも半数以上の大学生が、大岡信の解釈に反論を加えるか、多いときには、84.2%の学生が彼の解釈を納得しない可能性があるということである。

次に和歌bについて同じように回答結果をみてみよう。

大岡信と同一の解釈	11人	27.5%
大岡信の解釈への反論	26人	65.0%
無回答・その他	3人	7.5%

先ほどと同じ理由から、95%の信頼区間を計算すると、次のような結果となる。

大岡信と同一解釈	13.7%～41.3%
大岡信の解釈への反論	50.2%～79.8%
無回答・その他	0%～15.7%

和歌aの場合と比べると、同一の解釈の学生が二人増加しており、そのことが信頼区間にも影響しているが、基本的には、和歌aの場合と同じで、三つのグループの相対的關係は安定的であると言えよう。従って、日本の大学生全体にアンケートを取った場合でも少なくとも半数以上がなんらかの反論を加え、多い場合には79.8%が反論を加えることになる。

3. アンケート①の回答の具体例とその分析

次に、アンケート結果をより詳しく分析するために、それぞれの和歌についての大岡信の解釈に対する学生たちの反論例をみてみることにする。

3-1・和歌 a の大岡信解釈に対する学生たちの反論例とその分析

和歌 a に関する大岡信の解釈にたいする反論、すなわち別の解釈はいくつかの点に集中している。その一つは、大岡信の「子」の捉えかたへの反論である。数的にみれば、この問題を指摘しているのは二人であり、他の問題への指摘数と比べると相対的に少数である。そのうちの一つが次の反論である。

—大岡信さんはこの歌と並ぶ歌を根拠に、作者の息子が母親の影響で進路を変えたと推論している。だが、この二つの歌の中で歌われている二人の子が同じ子供であるとは限らない。—（フランス語3年生・女性）

実際、当該和歌においては、単に「子」と書かれており、参照している和歌では「長の子」となっている。だとすれば、この和歌の作者には複数の子供がいる可能性があることになり、二つの和歌に出ている「子」が同じ子供を指していない可能性も否定できない。また、二つの和歌のみを根拠にして考えた場合には、二つの和歌の「子」が共通していると考えることができる根拠は、どこにも発見できないことになる。その意味で、この学生の指摘は、科学的論証としては正しいことになる。

「子」についてはさらに別の視点からの批判がある。

—この大岡信さんの解釈に出てくる子供が男の子となっているが、この二つの歌からはどちらかわからないと思う。—（フランス語4年生・女性）

実際、和歌二つから、「子」を男の子と解釈するための科学的根拠は何も発見できない。従って、科学的論証として考えるならば、「子」が男の子である確率と女の子である確率はそれぞれ50%であることになる。「子」が女の子で

ある可能性を全く考えないとすれば、その理由のひとつとして女性差別観が存在している場合もありうる。

加えて「子」が、作者自身の子供であると断定できる根拠は、和歌の中には存在しない。文学作品というものが、フィクションとしての世界を作ることが可能であることを考えるならば、なおのこと、どちらの和歌の「子」も、作者自身の子であるという断定は不可能となる。

それらのことをもとにしながら、二つの和歌に出ている「子」の解釈のケースを、重ならないかたちで、できるだけ大きい分類で考えると、次のかたちで成り立ち、どの可能性の確率も等しいことになる。ただし、分類は便宜的なものであり、さらに細かく分類することも可能であるが、その場合には関係する確率はさらに低下することになる。(このことは本稿のすべての分析について妥当することである。)

1・二つの和歌の「子」が共通である場合

1-1・「子」が共に作者の長男である場合

1-2・「子」が共に作者以外の人の長男である場合（たとえば作者の孫の場合もありうる）

1-3・「子」が共に作者の長女である場合

1-4・「子」が共に作者以外の人の長女である場合

2・二つの和歌の「子」が違っている場合

2-1・共に作者の子であって、aの子が長男・長女以外の場合

2-2・aの子が作者の子、参照和歌の子が作者以外の人の長男・長女である場合

2-3・aの子が作者以外の人の子、参照和歌の子が作者の長男・長女の場合

以上のどのケースにあたるかは、科学的論証の問題としては、それぞれ14・3%となる。そしてそれら7ケースのうちのひとつである大岡信の解釈が、50%以上の確率で成り立つといえるためには、二つの和歌の中にその根拠がなければならないが、和歌の中に根拠を見つけることは困難である。

学生たちが反論している第二の点は、大岡信が「どうやら母親なる作者が大きく関与したらしい。」と書いている点についてである。そして、その点についての指摘は、最後の部分の「母親の感化力は大いなるかな。」と書かれている部分への反論と対になっている回答が多い。そのような回答例をあげてみよう。

－「どうやら母親なる作者が大きく関与したらしい」「母親の感化力は大いなるかな」の二つの文章に問題があります。作者の息子が進路を転換したことは、「指揮者になる～マウス操る」で示されていますが、母親である作者が息子の進路転換に関与したと推測できる根拠が示されていないからです。

－（フランス語3年・女性）

別の学生は次のように回答している。

－ 息子の進路転換に関与したのが母親なのかが疑わしい。この歌から母親の感化力について言うには無理があるのではないか。

－（フランス語3年・男性）

これら二つの回答だけではなく、子供が道を変えたのが、母親によるものかどうかという点についての疑問を書いているのは全部で9人である。その中に、和歌の中の「痛み」を、作者の心の痛みではなく、子自身の痛みと解釈している例がある。すなわち、子供自身が自分で夢をあきらめ、道を変えたことの子供自身の痛み、という解釈である。簡単にいえば、「痛み」は二つの場合が考えられることになる。一つは、作者の痛みの場合であり、別の一つは子供自身の痛みである場合である。そしてそれらの二つのケースに、道を変えた主体の可能性を考えると次のようなケース設定が可能となる。

1・痛みが子自身の痛みである場合

道を変えた主体のケース

1-1・子供自身

1-2・それ以外

2・痛みが作者の痛みである場合

道を変えた主体のケース

2-1・子供自身

2-2・それ以外

この場合には、ケース数は4ケースであるから、どの場合に当てはまるかという確率は科学的には、それぞれ等しく25.0%であることになる。すなわち大岡信の解釈、2-2のケースが成り立つ可能性も25.0%以下となる。

先の「子」の問題に関する解釈可能数7ケースのうち、aの歌のみに関するケースを抽出すると次のようになる。

1・「子」が作者の長男である場合

2・「子」が作者の長女である場合

3・「子」が作者の、長男以外の男の子である場合

4・「子」が作者の、長女以外の女の子である場合

5・「子」が作者以外の人の子である場合

それらの5ケースと「痛み」の問題についてのケース数を組み合わせると解釈可能数は20ケースであり、その一つのケースが成り立つ確率は、5%となる。

3-2・和歌bの大岡信解釈に対する学生たちの反論例とその分析

和歌bに関する大岡信の解釈への反論を大岡信の解釈文の順に紹介すると、まず出てくるのは、シャツを手に入れたのが男性であり、聞いているのが女性であるといえるのかという疑問である。そのことについては、3人の学生が指摘している。実際、苦心を語る人と「われ」が、女性同士の関係、男性同士の関係である可能性を、和歌の中の根拠から否定することはできない。和

歌が文学作品であり、作者が、他者になりかわって作品を作ることが可能である以上、和歌の歌い手が男性であるとするのも一つの正当な推論でありうる。そのような推論は、むしろ独創的な推論という意味では高く評価される必要があるだろう。

次に、大岡信が「たぶん自慢しながらの成功談」と書いていることに対しては、ある学生は次のように批判している。

一気に入ったシャツを苦心のあげく手にいれた男性が「自慢しながら」成功談を語っているとはかぎらない。－（フランス語4年・男性）

この学生の指摘は妥当である可能性がある。なぜなら、「苦心して手に入れた」のであれば、自慢することは難しい可能性を否定できないからである。そして、この問題は、大岡信の解釈の後半の「鼻持ちならない色男」という部分にも関係してくることになる。

その部分に関して別の学生は次のように指摘している。

－男性と女性の描写が固定的すぎである。苦心してシャツ（女性）を手に入れるのはむしろ色男ではない人の方が多いのではないだろうか。

－（フランス語3年・女性）

この学生の批判と同じ批判を別の学生も書いている。それらの批判を否定できるような可能性、すなわち色男であるような場合を、「苦心」と両立するような形で考えることは容易ではないように思われる。ただ、まったくないわけではなく、男は色男であるが、女性はそれ以上に美人であるとか、男は色男で女性に持てるが、この和歌の中の女性との関係では、色男であることが全く役に立たない関係であったということは想定可能である。しかし、色男であると断定することは不可能であり、いろんなケースの一つとしか考えられない。すなわち、シャツを手に入れた人が、男性である場合、その男性の解釈についてはいくつかのケースが成り立つということである。

大岡信の解釈の最後の部分にある女性についての分析に関しては、学生た

ちからの批判が最も多く出ている。そのいくつかを紹介してみよう。

－この和歌から、女性が「醒めた目の皮肉屋さん」であることは読み取れないのではないか。加えて、「でも相手を優しい気持ちで思っている」とする点も飛躍である。最後の推論も飛躍で、この和歌から「誠実さ」へつながる論理的関係が見当たらない。－（フランス語4年・男性）

－和歌だけ読んでも、なぜ「相手を優しい気持ちで思っている」のかわからない。この文章を新聞紙上で読んだときにも、少し違和感があったことを覚えている。作者の愛情はもう冷めていて、相手のどのような発言にも無感動になった時にふと、「ああ、自分もこのシャツ同様、“もの”として手に入れられただけなのかも」と考えた。このような解釈も可能ではないだろうか。

－（フランス語3年・女性）

－“女性の方は醒めた目の皮肉屋”で、“相手を優しい気持ちで思っている”とあるが、後者は根拠が無いように思える。逆に、相手の話を醒めた目で皮肉的にとらえるという行為と、同じ相手を優しい気持ちで思うという行為は正反対の感情であり、この場面では優しい気持ちがあるとは思えない。－（フランス語3年・女性）

特に、「皮肉屋」かどうかという問題に関しては、複数の学生が、むしろ、聞いている方が自分もまたシャツのようにいつかは捨てられてしまうという不安を感じているのではないかということを書いている。

学生たちのそれらの反論もまた正しい可能性があると考ええると、解釈はさまざまに分かれることになる。

まず、和歌の中の二人が、男性か女性かということでは、次の四つケースがある。

1・男性 男性

2・男性 女性

3・女性 男性

4・女性 女性

次に、シャツを苦労して手に入れたことについての語る人間の心理としては、最も簡単なかたちでは二つのケースに分けられる。

1・自慢している。

2・自慢していない。

最後に、聞く側の人間の心理としては、次の四つのケースが考えられる。

1-1・皮肉屋である。

1-2・皮肉屋ではない。

2-1・優しい気持ちである。

2-2・優しい気持ちではない。

それらのケースを組み合わせると、解釈としては全部で32ケースが設定できることになる。一つひとつのケースについて正しい確率は、3.1%であり、どれが正しいかという決定的証拠は、和歌の中には存在していない。たとえば、その和歌の二人の関係が、ホモセクシャルの男性二人である可能性を否定できる科学的根拠は、和歌の中には存在しない。それを除外しているとするれば、それもまた、差別観が原因となっている可能性があるだろう。

4. より長文への一般的モデル化の試み

以上、和歌という短文に関して分析したことをもとに、より長文に関する一般的モデル化を試みよう。一般的モデルを考えるのは、本稿で導き出そうとしている仮説が、単に短詩について成り立つだけでなく、散文についても成り立つ可能性を実験的に模索するためである。

今、ある小説が、その重要な部分に関して、それぞれが平均して五つの単

語、または/および、単語以外の意味理解に関する問題、しかも相互に独立した問題を含んだ100の文から構成されていると仮定する。一つの単語が平均6文字からなっているとすれば、この場合の一つの文は、ほぼ和歌のケースとなる。また100文というのは、小説でいえば数ページの短編にあたるだろう。すなわち、単語、または/および、単語以外の意味理解に関する100文間の問題の重なりは無いとする。重要な部分のみを取り出した場合そうなるということであるから、より重要でない部分を含んだ場合は、1000文から成り立つような小説でもありうる。

小説であって、科学や学問の論文ではないから、それぞれの単語は、日常使われている単語であり、定義がなされているわけではない。従って、それぞれの単語、または意味理解に関係することについて、読者には三つの違った解釈が可能であると仮定することは、おそらく非現実的ではないだろう。たとえばカミュの『異邦人』の冒頭の文の「今日、母ちゃんが死んだ。」の中の「母」をどのような母と解釈するかについては、おそらくは3通りでも不十分であるだろう。その「母」が子供を溺愛する母から、子供を虐待する「母」までさまざまな可能性がある。おそらくは、具体的で誰にとっても同じものを指す言葉の場合には、解釈可能数は少なくなり、抽象的で心理的なことに関する言葉であるほど解釈可能性数は増加すると考えられる。加えて、意味解釈が個人の経験に依拠するものであるほど、解釈数は増加することになり、個人の経験の数分だけの解釈数が成り立つことになる。

三つの解釈可能数を仮定すれば、一つの文について3の5乗分の違った解釈が成立することになる。すなわち243のケースの解釈が成り立つ。一つの文について、243の解釈がありうるのだから、最初の4文（作品全体の25分の1）で、解釈ケース数は30億ケースを越え、全体の100文では、234の100乗となる。

ただ、それらの解釈ケースの中には、一つの解釈のケースとしては成り立たない、たとえば矛盾を含んでいるようなケースも含まれるから、それらについては差し引く必要があるが、しかし、それらを差し引いたとしても、解釈の可能性の多さと言う意味ではそれほどの違いはないといえるだろう。従って、極端なケースで考えると、その作品の読者の数だけ解釈の数がある可能性があることになる。

そのモデルは、文学というものが、それだけ多くの人にとって自分なりに読解可能であり、多くの読者をひきつけることができるという、文学や言語の可能性を示しているものともいえるだろう。逆に数学などの場合には、一つの解釈に到達できる人間しか受け付けない。その違いは、文学解釈において、どの解釈が正しい解釈かという結論を出すことの天文学的困難さや、さらには文学研究一般の困難さを示しているものであるともいえるだろう。

科学的論証として考えた場合には、一つひとつの単語について三つの解釈のうちどれが正しいかという疑いのような根拠や論証がないかぎり、すべてのケースは等価となる。従って、最初の4文についての30億ケースの解釈の、それぞれの正しさの確率は、30億分の1でどれも同様に確からしいとなる。同じような確率であるにもかかわらず、明確に断定しうる根拠なしに、ある解釈を正しいとすることは、科学的ではないといえるだろう。

問題を緩和するために、1文に五つの単語、または/および、単語以外の意味理解に関する、相互に独立した問題があり、それぞれが二つの違った解釈が成り立つと仮定すると、1文について32の解釈が成り立ち、最初の6文（作品全体の15分の1）で解釈のケース数は10億を超える。100文では32の100乗となる。この場合は、和歌bのケースがそのまま具体的な例となる。和歌aの場合にもこのランクのケースに近いといえるだろう。

さらに条件を緩和して、1文に三つの単語、または/および、単語以外の意味理解に関する、相互に独立した問題があり、違った解釈が二つあるとすると、1文の解釈可能数は8となり、10文（作品全体の10分の1）で1億の解釈可能数となり、100文では8の100乗となる。

さらに条件を緩和して、1文に二つの単語、または/および、意味理解に関する、相互に独立した問題があり、違った解釈が二つあるとすると、1文についての解釈可能数は4となり、14文（作品全体の6分の1）で2億の解釈可能数となり、100文では4の100乗となる。

さらに条件を緩和して、1文に一箇所だけ単語、または/および、意味理解に関する、相互に独立した問題があり、違った解釈が二つあるとする。この場合には、1文についての解釈可能数は2であり、27文（作品全体の4分の1）で、解釈可能数は1億を超えることになる。100文では2の100乗である。

そのことから逆にいえば、短編であろうと長編であろうと、その文学作品の中に二つの解釈の可能性がある、相互に独立している問題を含んだ文が27文あれば、それだけで、その作品の解釈可能数は1億を越えるということである。

ただし、その作品が、世界が閉ざされたかたちで体系化されていて、しかも緻密な構成であればあるほど、意味解釈に関する独立した問題は少なくなり、問題の多くは相互に関連した問題に変化し、一つの解釈差異について科学的論証ができれば、残りのほとんどの問題は連動して解決されることになる。たとえば、厳密な論理からなる古典的推理小説のような文学作品の場合がそのようなケースにあたるだろう。真犯人が明らかになる前には、登場人物の数と、言動の数の分だけの解釈が成り立つが、真犯人が明らかになることで、解釈はただ一つになる。そして、真犯人を断定するための証拠は、すべてその小説の中に含まれている。逆にいえば、登場人物の性格や、重要な言動の理由・動機についての疑いようなない証拠が、小説の中に完全に含まれていることが、その作品が体系化されているかどうかの一つの判断基準であり、解釈に関する独立した問題の数を決めるといえるだろう。

また、登場人物の誰が重要であるかという順位や、小説に含まれるさまざまな出来事の重要性についてのランク付けの根拠が作者によって文中で表明されていない限り、価値観が個人的で主観的なものであり、人によって違っているものである以上、それらの基準からの体系化も成り立たず、解釈に関する独立した問題の数は増加することになる。たとえば、一見脇役に思える登場人物が、実は最も重要な登場人物である可能性や、そうとらえる価値観を否定できず、その基準にたてば、同じ小説を全く逆に読むことが可能となる場合もありうる。他方、推理小説の場合には、殺人事件という基準によって自動的にランク付けられ、体系化されている。

さらに、より根本的に考えるならば、小説全体の最終的目的が誰にでも同意できるかたちで明確であるほど体系化傾向が強まり、その小説の各部分についても、相互に独立した問題の数は減少すると考えられる。そして、目的の明確化は、すでに先に述べた小説全体の緻密的構成を強める可能性があるとともに、登場人物や事件の客観的ランク付けを強める可能性がある。その

結果、小説全体がより体系化されるだろう。

そのような体系化された文学作品が娯楽小説には多くても、純文学を含む文学全体においては少ないとすれば、以上みてきたような緩和された条件においても、科学的論証という立場からみた場合の純文学解釈の困難さはほとんど変化していないと考えることが可能であるだろう。なぜなら、ある一つの解釈が正しい確率が30億分の1であろうと、10億分の1であろうと、1億分の1であろうと、%に変換して、有意味桁以外を切捨てれば、ほとんどゼロとなるからである。

科学的確率からみれば数億分の1の確率か、または、ほとんどゼロとっていい確率の正しさである解釈を、絶対に正しい解釈として教えることや、正しい可能性が高いものとして教えることが、科学的論証としては問題があることに間違いはないと思われる。そのように、正しさの確率の低い解釈を、唯一の絶対に正しい解釈として教える可能性は、意味解釈について、自分の解釈を徹底して疑い、他の解釈の可能性についてどれほど客観的にとらえているかという客観的認識力のレベルや、論理的に成り立ちうる場合の数をどれだけ考えることができるかというような科学的論証力のレベルや、社会的権威を持った人間の解釈に画一的に追従しない姿勢など、すなわち、教える側の文学研究者のデカルト精神の度合いと、正の相関関係にあると思われる。それは、優れた文学研究者であるためにはそれだけの高い研究者能力が必要とされるということを意味しているとも考えられる。(注)

5. アンケート②の回答の全体的分析と具体例の紹介

アンケート①を実施したあと、次回の授業で、学生たち自身が書いているさまざまな解釈と、学生たち自身は書いていないが、解釈としては成り立ちうる、可能なかぎりの解釈も紹介し、和歌の中の言葉を根拠にした科学的推論としては、どの解釈も等価である可能性があるとして位置づけた。そのような説明のあと、先に紹介したようなアンケート②を実施した。

アンケート②に対する学生たちの回答のうち38人に共通しているのは、高校までの国語教育では、単一の解釈を押し付けられ、別の解釈を考えること

などなかったということである。統計的にみると、40人中の38人であるから、%では95%となる。95%という数字の95%信頼区間を計算すると、88.2%から100%となるから、学生たちの回答は、日本の国語教育の全体像を忠実に示している確率が高いということになる。

すなわち、日本の国語教育は、さまざまな解釈が成り立つ文学について、一つの解釈だけを正しいものとして押し付けているということである。

全体的分析としてはそのようになるが、学生たちの回答は、より現実に近いかたちで彼らが受けてきた国語教育が、デカルト的精神（近代科学の根源的精神）と無関係であるのみか、どれほどデカルト精神への可能性を否定しているか、ということを証明している証拠としての価値が高いと考えられるためと、筆者が内容をまとめるよりもよりはっきりと問題点を示していると考えられるため、以下、できる限りアンケート回答から重要な部分を紹介することにする。なお、証拠能力を維持するために、原文のまま引用してある。

1:高校までの国語教育で論理的思考力を養うという明確な目的を意識して参加する授業はなかったように思います。その対極に位置する文学作品についても、自由な解釈を楽しむということはなく、先生の解釈の押し付け、その解釈がテストの唯一の解答になることが往々にしてあったと思います。

（フランス語3年・男性）

2:一番最初に思い出したのは、小・中・高の授業や試験でよくみた問題文「次の文章のうち登場人物の心情として最もふさわしいものはどれか？」や「登場人物の心情はこの時どのようなものであったのか？」といった文であった。もともと答えは一つに決められていて、他のいろんな解釈は許されていなかったのではないかと私は記憶している。（フランス語4年・男性）

3:文学の解釈を深く考える機会がなかった。文章読解問題でも答えはたいてい一つ、多くても二つで、その答えが正しいと思っていた。問題、文章共にそこには誤りがないものと信じて疑わないような教育なので、疑問を持って自分で考える思考力が培われないと思う。（フランス語4年・女性）

4: 高校時代の国語の授業では、与えられた教材を1%の疑問を抱かずに、正しいものとして扱ってきました。その上で、一般の問題製作者が考えるだろう解答を導いてきました。ほとんどは僕達の予想の範囲の中に解答がありました。今日考えたことは、もしテストの問題の製作者が、本日のような多様な思考能力を発揮したら、現代の国語教育（受験対策）は成り立たなくなると思いました。なぜなら、高校3年生の数だけ答えが存在する可能性があるからです。（フランス語4年・男性）

5: 高校までの国語教育というのは、自らが感じたこと、思うことによって問題を解くことはあまりいいとされない。教師が持っている本、解説書の解釈にのっとなって、文章を読まなければならない。その結果、皆が同じような解釈をせざるをえない。自分達の推論力、想像力というものを発揮することができない教育を受けていると思う。学生生活の中では、人と違う解釈というものをあまり好まない傾向があり、推論や想像の芽をつみとる可能性があるのではと思う。なので、今回、自分なりに解釈すると、こんなにもいろいろな人と違うのかと思った。（フランス語3年・女性）

6: 国語のテストにはよく文章の解釈についての作者の意図などの選択問題があったけれど、その問題の正解が一つだけという考え方がおかしいものとなってくると思う。そうなれば、今までの国語教育をもう一度考え直して、新しい教育法を考え出す必要性が出てくると思う。（フランス語4年・女性）

7: 私にとっては、中学・高校における国語の授業は日本語の表現や語彙を増やす時間であった。テストの問題は「漢字」や「最も適切な接続詞を入れよ」だとかは有効だと思うが、「主人公の気持ち」などと聞かれても、人それぞれ感じることは違うだろうし、「それが何を指すか」なんて問題にされるような分かりにくい文章を書く人がいけないと思っていた。しかし、それを国語の教師に訴えても「なまいきなことを言うな」と言われ終わった。しかし、今日の授業を聞いて、私は自分の考えをやはり捨てきれないと思った。

（フランス語3年・女性）

8: 高校までは解釈がほぼ決まっていた。たとえ一つだとしても、なぜそうなるのか、別の解釈と比べてなぜ妥当なのかをていねいに説明すべきだと思う。そういうプロセスがなかった。なので、このように何通りもの解釈があって、こうともとれるし、ああともとれると可能性を出してくれたので、こういう授業があったなら、もう少し文学が好きになったかもしれない。また、さまざまな可能性を出してくれれば、あとは個人でそれをさらに検討することができ、単に解釈を教えるよりはるかに考えることができる。

(フランス語3年・男性)

9: 特に文学作品で、作者の気持ちを読みとる内容の授業では、他の解答の可能性を否定され、納得のいかないことが多々あったが、解釈の可能性を否定する方が不自然であると気づき、衝撃的であった。(フランス語3年・女性)

10: 高校までは、詩や寓話のように読者にその解釈が求められるものが取り扱われ、テストにもよく出ていたが、その答えはいつも一つでそれ以外の解釈は間違いだった。しかし、今こうして批判的に捉えてみると、様々な解釈ができ、自分の考えつかなかったことを知ると非常に楽しい。頭を使う、考えるということは、まさにこの楽しいということにつながり、高等教育のつまらなさ、生徒のやる気のなさを解決するひとつの方法になりうると思う。

(フランス語3年・女性)

11: 高校までの国語教育では、歌や文章の解釈の仕方、「正しい解釈」までを教えられた。(それが実際に正しいかどうか不明なので、「」をつけた。)そして、その解釈について、自分がどう考えるか、という間接的な解釈、意見を考えていただけであったように思われる。科学的な論文も、そうでない小説や詩も、解釈の仕方に区別なく教えられたので、その二つが対極にあるとは今まで考えつきませんでした。(フランス語4年・女性)

12: 高校までの国語教育では、答えは一つしかなくて、その答えを見つけられるような読解の仕方を習いました。しかし、今回の和歌の解釈をとおして、

文の解釈というのは、10人いれば10通り答えが出るのが普通なのに、これまでの国語教育しか受けておらず、今回の授業を受けるチャンスがなかった人たちは、今まで通り一つしかない答えを求めて読むことしかできない。このことは、これから大事になってくる新しい発想を柔らかい頭で考えることができない人間を育てることになるのではないかと思います。

(フランス語4年・女性)

13：高校までの国語の授業では、教科書などを批判的に読むなどということをした記憶がない。教科書を読み、そこから読み取れる内容を細かく吟味していくというものが多かったように思う。詩や俳句を読むときも、それについて感想は書くが、批判をしなさいというものではなかった。しかし、この授業で初めて、今までなら正しいと思い込んで読んでいた文章を、疑いながら読むということをした。確かに、人間が書くものであるから間違いもあるし、人によって感じ方が違うのだから、すべての文章が正しいわけではない。今までと違った目線から読むことを学び、国語というものもこういうものではないか、とも思った。(フランス語3年・女性)

14：小・中・高・大学と、今まで学校の先生に教えられて来た事は、絶対的に真実であると思ってきた。疑おうともしなかった。この授業で先生は、すべてのことに対してうのみにしてはいけない、疑わなければいけないとおっしゃられて、確かにそうだと思います。でも身の回りのことすべて（ここでは学校の教育）に真か偽かを判断していると時間がいくらあっても足りません。それに小学校や中学校の子供にそのような判断が適切になされるとは思えません。だから私は、小・中・(高)でありったけの知識を、真偽を問わず詰め込んで良いと思います。でもいつかは、自分で判断する事を知る必要があります、その時期が早ければ早いにかしたことはありません。誰が、どの時期にその事を気付かせてあげるかが問題だと思います。(フランス語3年・女性)

15：私が受けた高校の国語の授業は、文章を分析し、解釈し、理解するというよりは、誰かが既に作ったある文章に対する解釈を、唯一の正解として教

えられ、覚えていただけたように思います。一つの文や文章を読むにしても、一つの単語の表す意味や構成を論理的に分析しなければ、正しい理解はできないと思いました。(フランス語3年・女性)

16：高校までの国語は、なぜあれほど文章の解釈を断言し続けたのだろうか？と疑問に思った。いくら教科書とはいえ、作者に真意を確かめたわけではなく、一般的解釈として押し付ける。論説文とかならまだしも、物語などは様々な解釈が考えられると思うのに。これは、解釈という名のもとに、様々な解釈の可能性を潰しているのではないのだろうか。(フランス語3年・男性)

17：先生が言った文章の解釈が正解であると考えるきらいが(高校までの教育には)あると感じた。他の解釈は間違いだ考える。国語の授業で文の解釈の仕方を身につけるのも大切だが、もっと文を分析することや、文を書くことに対する力を養っていくべきだと思う。(フランス語3年・女性)

18：高校までは、俳句等の意味を与えられ、背景を説明され、そのまま頭に入れていた。でも人によって解釈が違うのは当たり前だと思った。その俳句を作った人に直接聞いてみたり、その人自身が書いた解釈を読まないで、何が本当なのかわからないからである。(フランス語4年・女性)

19：今までの国語教育では、書いてあることを疑うということは一切教えられなかった。書いてあることはすべて真実であるという前提があったように思う。内容を深く読みこんで、自分の中で判断していくというよりも、まるでパズルのように問題に対する答えを探し出すというものだった。解答を読んでも、助詞や接続詞をもとにした説明だけで、全く理解できないこともあった。本当の国語力というのは、今やっているような授業によってつくものだと思う。(フランス語3年・女性)

20：高校までの国語教育は、ある意味で「楽」だったと思う。古文にしても現代文にしても、疑問が湧き出ても、あるいは疑問が湧き出る前に、正解が

与えられたので。それに比べて今は、考える作業をしているので、刺激的であるし、学んでいる感触が心地良い。(フランス語4年・女性)

21: 国語教育の中心的なものの一つに、文学作品の解釈がある。今回の和歌についての小テストでも明らかになっているように、文学作品の解釈には幾通りもある。どれが正しいとは一概には言えない。にもかかわらず今までの国語教育では教師が一つの解釈だけを授業中に示す。テスト時では、その解釈でないと間違いにされてしまう。記号問題などは特に解釈の限定を強要していると思われる。教師ももっと広い視野で生徒の解釈を受け入れるべきではないかと思う。(フランス語3年・女性)

22: 高校での国語教育は、自分の思ったことは正しくても先生の意見と一致しないと、テストのときは不正解となる。学生の独自の発想を生かすのではなく、先生がむりやり教え込んでいるだけだ。(フランス語4年・女性)

23: 高校までは表面上だけの中身のないものだった。あまり頭を使うことがなかった。今は一つの文章をかなり深いところまで掘り下げていくので、色々なことを考えさせられる。(フランス語3年・男性)

24: 高校までの国語教育では、文学作品の内容を解釈するに際して、いわば一つの模範解答(最も広く受け入れられている見解)のようなものであり、その他のあらゆる解釈の可能性を検討しようとしない。対して、様々な角度から「推論」を通して解釈すると、そのように「一般的には受け入れられていないが、可能性がゼロというわけでもない」解釈の仕方の存在に気付くことができる。これは特に、文学など、芸術に係わる文章について当てはまるように思われる。(フランス語4年・男性)

25: 高校までの国語教育は、「答えが一つ」であった。先週の小テストに関連して思い出すのが、小学校の頃、国語の時間に俳句を取り上げたときのこと、私がある俳句に対して書いてきた解釈の文章が、それは違う、本当はこ

うだ、と直されたことである。その時のどこか納得いかない感情は、本来持って自然な感情であったのだと、今になって思う。答えを一つにしてしまう国語教育は、子供の自由な発想を制限し、想像力を養うのを妨げてしまう。

(フランス語3年・女性)

26：高校までの国語教育は、一つの決まったとらえ方を皆で共有することを目的とするものであった。だぶん正しいであろう解釈を、なぜそうなるのか、また、反論がないのかといったことを無視して、そのまま頭につめこんでいく作業である。私自身も、疑問に感じたことをつきつめることなく、テストのためと思い、解釈を丸のみにしていたことが多かった。先生の言う一つの答えこそが絶対であり、それがテストされて採点されるのであるから、どの生徒もそうせざるをえないだろう。もし自分の考えが正しいとしても、それがテストで評価される可能性は限りなく低いのだから。(フランス語3年・女性)

27：高校まではより一般的な意見や考えをもとにして解釈していたし、ゼロではないけどありそうもない考えについては除外していたが、このようにより深く厳密に考えを進めていくと、違ったおもしろさなどが出てきて良いと思った。(フランス語3年・女性)

28：小学校の国語教育では、詩や俳句などは先生の解釈などを聞いてそのままのみにするだけであったように思う。つまり自分で様々な解釈を想像したりということではなく、一つの解釈しかなかった。しかし今回行ったものは、作者の性別から状況まで自由に様々な解釈ができた。(フランス語3年・男性)

29：高校までの国語教育では、むしろ既にある文学作品への解釈を一般的に通用するものとして教え込まれてきたように感じる。従って、例えば、和歌や俳句のような文学作品は様々な解釈を可能にするという印象は、それ程強くなく、科学的・学問的論文(様々な解釈を許さず事実を誤解なく伝えるべきもの)との決定的な相違が明らかにされていなかったかも知れないと感じた。(フランス語4年・女性)

30：高校までは答えは一つに決まっていた。その日一つの答えを出すために論理力を用いるが、その論理力も一つだけで、その他の論理力は間違いとされた。しかし、今やっていることは、答えは一つだけとは限らない。強いて言えば、答えは人の数だけある。イメージとしては、今までは白か黒かはっきりしていたが、その中間のグレーの部分もある感じた。(フランス語3年・男性)

31：高校までの国語教育は、まず生徒にその文章を読み解く目的をはっきりと伝えない。だから生徒は、詩や小説と説明文という科学的文章を同じ一つの「テキスト」としてしか見ず、よって、科学的文章とそうでないものの区別がつかない。または、そういった区分があることも知らない可能性もある。この二種類の文章は、はっきりと分けられるべきである。それか、「現代文」「古典」といった分け方をやめて、この二つの分け方を採用し、別の時間にやったほうがいい。詩や小説といった文章はテストに使うべきではない。一つの解釈しか授業では正解とみなされないからである。(フランス語3年・女性)

32：いろいろな解釈があり興味深いと感じました。国語は特に様々なとらえ方があり、数学とは違って、答えが一つとは限らない教科なので、そこが私の好きなところです。ただ、勉強として国語をすると、「様々な解釈」という幅をせばめてしまうと思います。(フランス語3年・女性)

33：国語の先生が言ったこと、あるいは参考書に書いてある解釈を何の疑いもなしに暗記しようとしていた。なぜなら、テストの時に、その通りかけば点数が高くなり、違うことを書けば、点数が低くなるからだ。従って、たとえ和歌や俳句、文学作品を読んで、色々な想像を膨らませても、ただちに打ち消され、作品を楽しむこととはほど遠い授業であったのではないかと思う。
(フランス語4年・男性)

34：高校までの国語の時間では、一つの詩や文章に対して、ただ一つの正しい解釈が決められていて、自分の解釈をテストで答えると、不正解にされ、

疑問を持ったことがあったが、このように何通りも解釈できたほうが、詩や文を読むのが楽しかった。(フランス語3年・男性)

35: 授業で、ある文章についての解説を聞くと、一つの解釈だけで、他の解釈を聞くことがあまりない。数学は答えは一つだけで、国語は多数あるとよく言われるが、実際は国語の答えも決められていると思う。

(フランス語3年・女性)

36: 詩や歌は、それを読む人それぞれに違った感じ取り方、受け取り方があって当然だと思います。高校までの国語教育では、先生が黒板の前に立って、「この歌には～という意味が込められている。」などといった、多くある解釈のうちの一つしか説明せず、生徒はそれをノートにとるという、全く無意味なものでした。生徒がそれぞれに歌や詩を読み味わうことをうばったとも言えると思います。(フランス語4年・女性)

37: 私は高校までの国語教育、特に詩や物語の読解授業について疑問を持っている。高校までの国語は一方的な解釈を生徒に押し付け、試験で「作者の考えること、思っていることを選べ。」という問題においても、実際作者に聞かないとわからないことや、あるいは、聞いてもわからない無意識の中に、異なった感情があった可能性がある。また、出題文のみからでは、あらゆる考察、推論が可能で、解答は一つではないという可能性がある。故に、私は、一つの考え方のみを正当とし、他の可能性は「ありえない」と納得できない理由で切り捨てる国語が嫌いで、理系に進んだ。

(フランス語4年・男性：理系からの編入生)

結論

学生たちのそれら個別の反応にも現れているように、日本の国語教育においては、短詩の解釈だけではなく、より長文の解釈においても、さまざまな解釈が成り立つことを教えていない可能性が強いと思われる。国語教育にお

いて、ある文章についてさまざまな解釈が成り立つことを正確に教えないことは、科学的論証との関係では二つの意味を持っているといえる。

その一つは、科学的論証のために文章としては、短詩が反面教材であるということを教えていないことである。明確に定義されていない日常の言葉を使っている場合、短詩になればなるほど、現実を明確に指定することは困難になり、その結果、どのようにでも解釈できる文章となっていくだろう。そのような、どのようにでも解釈できる文章は、科学的論証のための文章としては、真似してはならない悪文である。もちろんそのことは、そういう文章の文学としての独自の魅力や価値とは全く別の問題である。しかし、科学や学問というものは、学会や学会誌への発表が不可欠であることが示しているように、相互の議論や批判を不可欠の手段として発展する。しかし、どのようにでも解釈できる文章の場合には、書き手が意味することと、読み手が理解することの間にずれが生じるために議論や批判そのものがかみあわず、成り立たないことになる。そのようなことを考えるならば、科学や学問の文章というのは、すなわち科学的論証のための文章というのは、誰が読んでも一義的に理解できるものを目指さなければならないことは明らかである。

短詩のような文章が科学的論証のための文章としては、真似してはならない悪文であるということを教えるためには、短詩がさまざまな解釈を許すものであるということを示すことが不可欠である。しかし、学生たちのアンケート回答からわかるように、日本の国語教育においてそのようなことは行われていない。その結果、短詩を典型とするような、多義的でどのようにでも解釈できるあいまいな文章が良い文章として学ばれている可能性さえあることになる。実際、卒論の指導や審査において出会うのはそのようなあいまいな文章である。

他のひとつは、一つの解釈を正解として教えることによって、短詩に含まれていることを根拠とするならば、さまざまな推論が成り立ち、どれも可能性としては等しいという正しい科学的認識や科学的思考力を否定していることである。また、さまざまな解釈が成り立つのが当然であるときに、教師などの権威を持った人間の一つだけの解釈を押し付け、それに生徒たちが従順に従うことは、誰が正しいとすることであっても徹底して疑い、納得できる

根拠や論証が発見できなければ疑わしいものとして信じないという、デカルト精神を否定することでもある。それはまた、生徒たちそれぞれの個性や独創性の開発を阻害しているともいえるだろう。そのことは、たとえば直接的には、将来の文学研究者や言語学研究者の非科学性と非独創性をもたらす可能性もあるだろう。

人間の基本的な思考法が母語によって作られるとすれば、非科学的国語教育は、学生たちの科学的論証力や科学的思考力に対しても最も重要なマイナスの影響を与えている原因である可能性も否定できない。逆に、学生たちの科学的論証力や科学的思考力を本当にとりもどさせるためには、大学において、高校までの非科学的国語教育を否定するような文学に関する授業を行う必要があるといえるだろう。

(注) ひとつの文学作品について、論理的にはそれだけの数の解釈が、成り立ちうるということは、ひとつの文学作品というものを客観的に認識したり、価値観に基づいて評価したりする場合には、その文学作品についてのアンケート調査と、推測統計学に基づいたアンケート調査の科学的分析が不可欠であることを意味している。ある文学作品について興味を持っている複数の研究者による研究も、ある意味ではアンケート調査に該当するともいえるが、しかし、その文学への好き嫌いの感情の問題の偏りも含めて、研究者による研究は、その文学作品の研究としては、偏りを否定できないと考えられる。

その問題は、文学作品に対する賞の授与の問題にも関係することになる。特定の文学者による賞の授与は、その文学作品の評価の仕方としては、数億分の1の立場の表明でしかない可能性がある。だからこそ、フランスにおいてなされているような、高校生の投票による高校生が選んだ文学賞といったものが、科学的立場からは重要な意味を持つことになるだろう。

その問題は、文学だけではなく、映画などの科学的分析や客観的な評価についても同じようにいえることであり、さらには、すべての芸術についての科学的分析と客観的な評価についてもいえることになる。逆にいえば、科学的なアンケート分析に基づかないあらゆる分析や評価は、客観的でも公平でもない、単なる個人的かつ趣味的かつ恣意的私論であるということになる。もしそうだとすれば、単なる個人的・趣味的・恣意的私論そのものに問題があるのではなく、それが、客観的真理の探究を目的とする学問や科学として位置づけられることに問題がある。